

Title	現代社会と不平等構造：社会的成層の研究
Sub Title	Modern Societies and the Structure of Inequality
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.10 (1974. 10) ,p.37- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19741015-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代社会と不平等構造

—社会的成層の研究—

川 合 隆 男

不平等への関心

社会的成層の理論的展開

〔Ⅲ〕〔Ⅱ〕〔Ⅰ〕

社会的成層の構造と動態

〔Ⅰ〕 不平等への関心

(a) 近代社会の展開と現代

近代社会の生成と展開の過程にみた、所謂身分から契約へ、市場経済、経済成長と発展、ナショナルリズム、立法国家と民主政治、軍隊・教育の普及と拡大、閉鎖的な共同体から開放的な共同体へ、個人の解放、合理性・業績主義・平等といった類のいわば中世、封建、あるいは伝統と近代とを二分法的に対比してそこに「進歩」や「発展」を見い出そうとしてきた営みが、同時に偶像化し石化し、またある人々に深い苦痛をもたらすことに気づき始めたのは決して新しいことではない。ここでいうある人々とは、次のことを指している。——権利としてよりも恩恵として扶養される保護・保障層（身障者・重症

人家庭・母子家庭、生活保護層、老人層、児童・婦人層。未組織労働者、零細自営層、農民、組織労働者。発展途上国における被抑圧者、民衆。偏見によつていわれない差別を受けている人々。資源不足や自然環境の破壊で第一次的な被害を直接受けている人々。人間がみずから自立的に生活を営む上でのさまざまな苦痛と差別を受けている人々を意味している——。だが、そのことが明白に意識され問題視されるようになったのは二〇世紀初頭以降といえるし、人々の間で広く根源的に問ひ直されるに至るのは新しく一九六〇年代に入つてからといえるのではないだろうか。「現代」という歴史状況は、われわれが過去と現在と未来をどのように結びつけていくのかという選択的な生き方の模索と決断と闘いである。

社会学者の立場を少し離れてもつと基本的・倫理的立場にたちかえつて考えてみるなら、人間にとつて「現代」においても、また将来においても生存、幸福、自由、平等といった言葉と理念は消え去るものではないだろう。これらの社会的正義 (social justice) としての言葉と理念は、個人にとつても集団・国家にとつても歴史をかたちづくる強い契機となり、また普遍的な目標とされてきた。しかし、今日までのところ、それらは確実な歩みが続けてきたといえる反面、常に相対的にしか実現されていない。全く単純なことであるが、生存、幸福、自由、平等などを実現するために工夫してきた数多くの、そして複雑で巨大な方法と装置が皮肉にも逆に本来の目標にとつて桎梏となりつつあり、われわれは「現代」という歴史状況において、生存、幸福、自由、平等などについてさまざまな文脈の中からあらためて根源的に問ひ直す道標の前に立つている。

「道徳に関しては、単純で自然な仕方が何ものにも優っている。しかし、人間は無駄骨折に隙をつぶすとそれだけ益々振出しに戻るの¹考えるだに恐ろしくなるものである。それはあたかも、ひとがもう一度始めからやりなおして事を仕上げるよりも事を成行に任せ無理なからくりの力に委せておく方を有利だと思ふものだからであつて、却つて、ひとは此の気持で実は絶えず事を始めからやりなおし、永久に一步も進まないものなのである」。

われわれにとつて歴史は単純な繰り返しでもないし、簡単にあと戻りすればよいということでもない。人間と自然の関係

において、自然が豊富な恵みと営みの源泉であり得る様に、歴史的に繰り返されてきた人々の歩みの中に踏みしめ確かめてきた生存、幸福、自由、平等などの根源的諸価値を見失わないように「現代」を分析し検証することが人間と歴史との関係でなければならぬ。「現代」の社会科学者の課題もここにある。いい換れば、歴史的遺産としての広い意味での個々の人間の自立化と連帯への歩みを検証し、それを後に続く人々のために地に着いた大道にすることでなければならぬ。その課題は個々の人間の自立化と連帯への社会的諸条件、社会構造の諸変化、社会的実践等を科学的に明らかにしていくことである。

(b) 産業化、社会革命と不平等構造

近代社会の生成展開は産業化の過程を一つの主要な推進力としたが、その産業化 (Industrialization) は人々の相互行為を通じてのイデオロギーとしての産業主義 (Industrialism) の生成導入とその拡大、高度化のプロセスである。イデオロギーとしての産業主義が従来の伝統的価値との葛藤の中でその社会に正当性を得つつ、同時にその社会構造および組織が第一次産業以外の諸産業を中心とする生産形態に適合的に編成され、産業主義が主要な役割を果すようになる過程である。⁽²⁾ 産業主義は (a) 合理性、業績主義、平等の原理、(b) 専門的分業、(c) 肉体的労働に代わる機械の使用、(d) 機械的エネルギーの活用、の諸特性によつて特徴づけられるが、その生成、導入、拡大、高度化は①産業主義と産業化、②産業化のひき起す社会的影響、③社会的緊張、社会不安と社会問題の三つの動態が複雑に入り組みながら繰り返されてきた過程で、果して現代社会において不平等構造としての社会的成層はどのように把握され分析されるのだろうか。(i) 産業化による生産の全体的増大はその富の配分とどのように関係するのか。⁽³⁾ 産業社会 (なにかんづく資本主義社会) においては増大された生産物 (剰余価値) はますます不平等に配分され極限化 (窮乏化) してきたのか (窮乏化理論)。またさまざまな背景を無視して一様に不平等の平準化や生活の大衆化がどこまで指摘できるのか (平準化理論)、(ii) 技術革新と官僚制化は、集団、組織、権力の存続のために、ますます

権力や技術、科学の機能化（機能的合理化）と集中化を押しすすめて権力者や支配者による操作や搾取を容易にさせてはいないか。個人々は、こうした状況にたえずむ限りでは、機構の中で機械化・無力化・疲労化・孤独化し、また変化と移動を求める（新しいものへの期待、昇進、機会の獲得）が、暗示、模倣、流言、操作等にさらされ易いのではないか。(iv)流動的で行動半径が拡大してきたとはいえ、われわれの生活は多面化・分節化してきたことも見逃せないのではないだろうか。こうした諸問題が現代社会の不平等構造を明らかにしていく手懸りを与えてくれる。現代社会において個々の人間の自立化と連帯への歩みにとつて、多分にその手段的価値をになう平等、不平等、その条件が、それとどのようにかわるのかを基本的に考察しなおすことが課題である。

そこで J・A・ジャクソンはこれまでの社会的成層研究の主要な領域として①成層の諸形態と諸要素を描き出すこと（例えばマルクスやウェーバーの研究によつて展開された如く）、②諸要素の構成因、そして異つた階級・階層の相互の関連を明らかにすること（機能主義、マルクス主義、闘争理論など）、③異つた階級・階層への接近と参加の問題（成層の開放性と閉鎖性の程度、社会移動、生活機会など）、三つを挙げたが、更に進んで現代の社会的成層研究の動向が、単一の（一様な）理論モデルにますます不満をもちつつ、現代社会のもつ動態的特徴が社会的分化の微妙で絶え間ない複雑な過程と、そして集合的個人的移動の進展のもとでの大きな巨視的集合状態とを共に描写し得るように、成層に関する概念装置の再構成を促しつつあると指摘しているのは適切である。⁽⁵⁾そして、そうした動向の重要な展開として(i)地位の適合 (Status congruence)、⁽⁶⁾ 整合 (consistency) と地位の結晶化 (status crystallization) の研究、(ii)産業化、組織の巨大化、社会的価値の変化等に伴う西欧の post-capitalist の社会と東欧の socialist の社会の間の共通基盤の程度についての研究が注目される。⁽⁶⁾更に南北問題にみる如く国際社会の成層化の問題にも注意を向けなければならないだろう。⁽⁷⁾

今日の社会的成層研究は、欧米、非西欧の歴史的文化的文脈における資本主義社会、社会主義社会、産業社会、発展途上

国、第三世界等の範疇を包括し得る諸理論モデル、同様に人々の相互行為の過程から不平等構造として制度化されるプロセスを把握し得る諸理論モデルの構築とそれらの検証が必要とされている。⁽⁸⁾後に検討するように、産業化や社会革命は社会的成層の非成層化 (destratification) をもたらすと同時に、再成層化 (restratification) をも促し易いこと、すなわち不平等構造は産業化や社会革命等による社会構造変化のもとで一面では平等化が進展する一方、他方では存続され、あるいは再編され易いこと、を成層研究の基本的命題としてとり組まなければならない。⁽⁹⁾現代社会における階級や階層の不透明性や概念や分析方法等のあいまいさのために、この成層研究は確かに依然として社会学及び社会諸科学においてもつとも困難な領域の一つとなつてゐることを認めるところから出発せざるを得ない。

「わたくしがここでたんに輪郭を示したような現代社会の変化しつつある階級構造の歴史的分析は、今日の社会学における未完成の課題のうちもつとも重要なもののひとつとして残つてゐる」(T・B・ポットモア)⁽¹⁰⁾

先に示した本論の基本的出発点に従つて以下従来の研究成果の要点を整理しておくことから始めよう。

周知のようにこれまでの社会的成層の研究の多くは、産業化が社会的成層の構造と動態にもたらした影響をめぐつて展開されてきたといえる。そこで D・J・トレイマンが従来の研究成果を諸社会体系の傾向の共変度 (covariation) の発見として比較分析し、横断面的で、しかも縦の時間的経過のうちに見られる明証を引き出そうとした論文をまとめているので、今後の研究の上で適切な手懸りを与えてくれる。⁽¹¹⁾ただし比較分析されている資料の多くがアメリカ合衆国のそれらに集中しがちであるという偏りは検討されなければならないだろう。しかし、われわれが研究を進めていくうえでこの命題 (proposition)・作業仮説 (working hypotheses) とつて活用していくことは可能である。トレイマンは産業化と、[A]成層の構造 (the structure of stratification)・[B]地位達成の過程 (the process of status attainment)・[C]地位達成過程の職業構造への関連 (implications of the process of status attainment for occupational structure)・[D]成層の結果 (the consequences of stratification)・との関係について各々

命題化している。

[A] 産業化と成層構造との関係¹²⁾

- (A・1) 社会が産業化されるにつれて、農業に従事する労働力の構成比は小さくなる。
- (A・2) 社会が産業化されるにつれて、職業構造内の異なる仕事の数は増えていく。
- (A・3) 社会が産業化されるにつれて、非農業労働力内の肉体労働従事者に対する非肉体労働従事者の割合は高くなる。

(A・4) 社会が産業化されるにつれて、学校教育を受ける子供達の構成比が高くなる。

(A・5) 社会が産業化されるにつれて、一人当り所得は高くなる。

(A・6) 社会が産業化されるにつれて、所得の平等は強まる。

[B] 産業化と地位達成過程との関係¹³⁾

(B・1) (社会が) 産業化されるにつれて、父親の職業的地位が息子の職業的地位に与える直接的な影響は小さくなる。

(B・2) 産業化されるにつれて、教育的達成が職業的地位に与える直接的な影響は大きくなる。

(B・3) 産業化されるにつれて、両親の地位が教育的達成に及ぼす影響力は小さくなる。

(B・4) 産業化されるにつれて、「交換」移動の割合は高くなる。¹⁴⁾

(B・5) 産業化されるにつれて、職業的地位が所得に与える直接的な影響は強くなる。

(B・6) 産業化されるにつれて、教育が所得に与える直接的な影響は小さくなる。

(B・7) 産業化されるにつれて、教育と所得との間の相関関係は小さくなる。

〔C〕産業化と地位達成過程の職業構造に対する意味合いとの関係⁽¹⁵⁾

(C・1) 労働力新入者の教育水準が教育を受けた労働力に対する需要以上に急速に増加するならば、労働力分布上の上昇移動に対して次のような圧力が生じるかもしれない。すなわち(a)非肉体労働力のコストが下降し、ホワイト・カラー部門の低コストでの拡大を認めることになるだろう。(b)行政体は、失業し高等教育を受けた労働者からの不安を減ずるために行政的官僚機構を拡大するかもしれない。(c)肉体労働のコストが上昇し、それにつれて、労働力を機械的生産手段へ代替しようとする誘因を与えることになるだろう。(d)そこで、得られる肉体労働の質は低下し、更に生産のオートメーション化への誘因をもたらすことになるだろう。

〔D〕産業化と成層の結果との関係⁽¹⁶⁾

(D・1) 産業化されるにつれて、(人々の)行動にみられる地位上の差異は著しいものではなくなつてくる。

(D・2) 産業化されるにつれて、行動への影響力の点で両親の地位のそれよりも現に占めている地位の影響力の方がより大きくなる。

(D・3) 社会移動率が高くなるにつれて、行動にみられる地位相互間の差異 (inter-status differences) は小さくなり、地位内の異質性 (intra-status heterogeneity) は大きくなるだろう。

(D・4) 故に、社会移動率が高くなるにつれて、社会移動的な人間が分裂的な緊張を経験し病理的反応に陥つてしまふだろうという見込みは小さくなるだろう。すなわち、相互作用の影響が緊張誘因的行動の仮説と一致するといふ見込みは小さくなるだろう。

(D・5) 産業化されるにつれて、移動の集団の様式に対して個人的様式の重要性が大きくなるだろう。

(D・6) 産業化されるにつれて、左翼的な政治組織への支持は少くなるだろう。

(D・7) 社会における地位の結晶化の度合が大きくなると、地位不一致の個人 (status-discrepant individuals) が分裂的緊張を経験し病的反応を結果してしまう、すなわち、相互作用の影響が緊張誘因的行動の仮説と一致する、見込みも大きくなるだろう。

(D・8) 社会における地位の結晶化の度合が大きくなると、所得が彼らの教育水準と釣り合う水準以下の集団は急進的な政治活動にかかり合う可能性は大きくなるだろう。

(D・9) 社会における地位の結晶化の度合が大きくなると、主観的な階級帰属意識 (class identification) の客観的地位特性への依存性は大きくなる。

(D・10) 社会における地位の結晶化の度合が大きくなると、階級的断層 (class cleavage) の度合は大きくなる。

われわれは従来の研究成果を基礎として研究を進めていくべきである。しかし、トレイマンも指摘しているように成層研究は多くははまだ西欧社会を中心としており、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国、社会主義諸国での研究成果は充分活用されているとはいえない。現代社会における不平等構造としての社会的成層の研究は、単一の全体論的成層モデル (holistic stratification model) や操作主義的理論モデルだけによつては明らかに不十分であり、異なる歴史的社会的文化的文脈の中でも分析し得る、しかも産業化や社会革命にともなう社会構造の動態と変化とそれの人々の日常生活、相互行為や感情、価値観との関連をも分析し得るよう進めていくことが要請されている。

しかし、ここで結論づけるとすれば、われわれは現実には産業化と社会的成層との関係については全く知っていないということである。……そして、われわれが提示した命題の殆んどは、まだ実証的支持をもたない仮説にすぎない。⁽¹⁷⁾ (D・J・トレイマン)

本稿でのねらいは、近代社会において不平等への関心がどのように生成したのか、更にそうした関心のもとにどのような理論化及び実証的研究が進められたのかを概観して、現代の社会的成層研究の理論的課題を明らかにすることである。そこで、以上の基本的視座、命題と仮説のもとに現代社会における不平等構造の問題を〔Ⅱ〕社会的成層の理論的展開、〔Ⅲ〕社会的成層の構造と動態の順序で検討する。

- (1) シュナイエス (Abbe Sieyes) 著 大岩誠訳『第三階級とは何か』岩波文庫 八〇頁。
- (2) Reinhard Bendix, *Work and Authority in Industry*, Harper Torchbook, 1963 (1956), J. A. Ponsioen, *The Analysis of Social Change Reconsidered*, Mouton & Co., 1962, W. E. Moore, "Industrialization and Social Change" in B. F. Hoselitz, & W. E. Moor, eds., *Industrialization and Society*, UNESCO-Mouton, 1968, Anthony Giddens, *The Class Structure of the Advanced Societies*, London, Hutchinson Univ. Press, 1973, 駒井洋「産業近代化への社会的学的アプローチ」(第四〇回) 日本社会学会大会、昭和四二年)
- (3) Gerhard E. Lenski, *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification*, McGraw-Hill, Inc., 1966.
- (4) John A. Jackson, "Editorial Introduction-social stratification", in J. A. Jackson, ed., *Social Stratification*, Cambridge, at The Univ. Press, 1968, p. 2.
- (5) *ibid.*, p. 11.
- (6) *ibid.*, p. 9.
- (7) G・シニェルダール, G・シンダ著 板垣監訳『ソビエトのドラマ(上・下)』, 東洋経済新報社 一九七四年 G・シニェルダール著 大来佐武郎監訳『貧困からの挑戦』, タイヤキエント社。
- (8) G. E. Lenski, *op. cit.*, Erik Allardt, "Theories about Social Stratification" in J. A. Jackson, ed., *op. cit.*, pp. 14-24, Andrew Tudor, "The Dynamics of Stratification System", *International Journal of Comparative Sociology*, Vol. X, No. 3-4, Sept. and Dec. 1969, pp. 211-233.
- (9) J. A. Jackson, *op. cit.*, pp. 9-11.
- (10) ホットキーン (T. B. Bottomore) 著 馬場・深田・田中共訳『現代社会の階級』, 川島書房 一九六七年 一五四頁。
- (11) Donald J. Treiman, "Industrialization and Social Stratification", in Edward O. Lauman, ed., *Social Stratification: Research and Theory for the 1970's*, N. Y., The Bobbs-Merrill Co. Inc., 1970, pp. 207-234.
- (12) D. J. Timan, *ibid.*, p. 217.
- (13) *ibid.*, p. 221

- (14) *Ibid.*, p. 219. この「交換」移動は、「構造的」移動に对照して用いられている。すなわち、一般に社会移動研究で用いられている世代内移動の概念に近い。数世代を通じての職業分布上の変化（構造的）移動が滅しても、教育、マス・コミュニケーション、都市化、地理的移動等の結果、個々人のより高い純粋移動率が期待される。See B. Hutchinson, "Structural and Exchange Mobility in Assimilation of Immigrants to Brazil", *Population Studies*, 8 (Nov.) 1958, pp. 111-120.
- (15) D. J. Treiman, *ibid.*, pp. 223-224.
- (16) *Ibid.*, pp. 228-229. このよう成層の結果とは、地位特性が、社会的行動の側面にどのような影響、帰結をもたらすか、を明らかにしようとするものである。
- (17) *Ibid.*, p. 229.

〔Ⅱ〕 社会的成層の理論的展開

先に現代社会における不平等、及び現代社会における社会的成層研究の主要な論点について触れた。現代社会の構造的動態とその変化が、そのもとで裏を返せば生活し続けている人々の生活の諸条件、機会、行動と様式、表現と意識を変化させてきた。従つて、固定的な単一の（絶対的な）理論モデル、あるいはあまりに忠実な、機械的な操作的分析方法（操作主義）によつては現代社会の不平等構造をより深く、より動態的に捉えることは出来なくなつてゐる。

これらのことが成層研究動向の上でも巨視的な階級構成的分析（階級、階級の諸形態・要素・相互関連、更にそれらの客観的研究がある時は主観的研究かの議論）や社会移動の研究に加えて、地位の整合と不整合、地位の結晶化（固定化）の研究、高度産業社会における成層研究―「資本主義社会」と「社会主義社会」の比較―、南北問題に示されているように国際社会の成層化への関心といった領域にも研究が広げられつつある。それだけにさまざまな理論モデルが必要となつてくる。しかしながら、それらのモデルがバラバラであつてよいというわけではない。従つて、これまでの社会学的研究の成果（特に理論的成果）また学際的な研究成果をも活用していく必要がある。

(a) 前提的な諸問題

今日の社会学者が一般に社会的成層 (social stratification) として名称し包括している研究領域は、財とサービス、権利と義務、権力と威信等のいわゆる資源 (resources) の不平等な配分、不平等 (inequality) の構造と動態を研究しようとするものである。社会的成層の理論的展開を跡づけていくに先立つて、初めにその手続上、方法論上の諸問題に触れておくことにする。

まず社会的成層の規定については、それが、社会的分化 (social differentiation) の概念とは、明らかに区別されるべきである⁽¹⁾。しばしば用いられる、社会的優位者と劣位者の順列の等級づけられた階統制の規定よりも、所与の社会において重要視されている財 (手に触れることのできる財、象徴的財であつても) の構造化された不平等の体系 (a system of structured inequality) という C・S・ヘラーの規定を参考にしたい⁽²⁾。更に「社会的に価値づけられた稀少資源の所有という点での人口構成」、「人々の間におけるこれらの資源配分の形」⁽³⁾、(価値、用具、あるいは評価の次元で) 諸単位 (役割、個人、家族、集団、あるいは理論家が特定しようとする範疇) が区分される一つあるいはそれ以上の序列体系 (rank systems)⁽⁴⁾、であるとするとところにみられるように、歴史的社会的制約のもとでの資源の不平等的配分構造にもとづく序列的階統制からなる人々の集合であるといえる。「稀少な資源」というとき、それは歴史的社会的に制約され、歴史的社会的に価値づけられた稀少な資源を意味する。価値としての望ましき、適しき、願わしきは文化的社会的に条件づけられた、一定の価値標準 (value standard)、それにもとづく生活標準が存在しており、そうした標準は、社会化 (socialization) を通じて学習されるのである。例えば、確かにわれわれの生活水準が相対的に上昇する。しかし、一定の標準に達しなければ「新しい貧困や不安」が生じることになる。明治期や大正期に較べて教育水準が一段と上昇したが、高校における普通・工業・商業・農業学校の大学進学率や社会的昇進の差異のように新たに教育機会の不均等が問題となつてくる。従つて、社会的成層は (i) 資源 (resources)、(ii) 資源配分

の単位 (units) (個人・家族、さまざまの社会的範疇)、(iii) 資源配分の水準 (levels) (地域社会の水準、全国社会の水準、東西・南北問題、人類問題等で明らかにされるように国際社会の水準)、(iv) 序列体系 (rank systems) が相互に関連している。ここでは特に資源と序列体系について説明しておく。ここでいう資源は広い意味での人々の行動目標を実現しうる可能性である。⁽⁵⁾ 資源は人々が生きていくうえで利用可能な諸手段の総体であり、その手段とは一定の歴史的社会的、そして自然的状況の中で行為者にとつて統禦し利用可能なものが手段であり統禦し得ない利用不可能なものは自然的社会的条件となる。だから、ある状況ではその資源が行為者にとつて手段 (means) であるものが他の状況においては目標 (goals) であり得るし、ある資源を所有し操作 (行使) 可能でよく知つている行為者にとつてはそれはまさに利用可能な手段であるが、それを所有しなかつたり、操作不可能で無知な行為者にはそのことが障害であり条件となる。そして、人々の行動目標、その実現のための利用可能な手段、そのより効果的な手段は歴史的に社会的に価値づけられ条件づけられており、しかも一元的一律的なものではない。従つて、資源については、一般に (i) 利用可能性・操作可能性、(ii) 選択性、(iii) 相互転換性 (手段の目標化)、(iv) 不平等性といったことが問題となる。マルクスの「あらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史である」という闘争史観は一面的な言及及でない⁽⁶⁾と考へるが、別の見方をすれば今日までの人間の歴史は、人間の自立化と連帯を目指して、資源を豊かに活用してきた (あるいは食いつぶしてきた) 歩みであり、それら資源の活用をめぐる階級間の闘いの歴史であるといえよう。資源はより具体的には (a) 生命、健康、容姿などの生物的肉体的資源 (労働)、(b) 富、用具、資材などの物財的資源 (所有)、(c) 資格、地位、威信、勢力などの社会的資源 (身分と権力)、(d) 知識、技能などの精神的情報的資源 (教育) に分けることができる。⁽⁶⁾

これらの利用可能な手段としての資源が個人、集団、社会的範疇によつて異つて不平等に配分されている構造と動態を明らかにすることこそわれわれの中心的な関心事である。序列体系ということは人々の間での資源の不平等配分にもとづく序列的な集合状態であるにとどまらずに、序列的階級制のもとにあつて人々の集合状態間に質的な差異があつて注目すべき不連

統性 (discontinuities) が持続されており制度化されていることを意味している。制度化によつて一般には (特に機能主義的見地からは) 習俗 (folkways) と習律 (mores) の相互関係のもとでの規範の受容、内面化、制裁の過程で展開され秩序づけられると理解されるが、そこには不連続性と多様性 (自由民と奴隷、尊いものといやしいもの、勝者と劣者、富めるものと貧しいもの、搾取と被搾取、支配と被支配、差別と被差別、同時的なものと非同時的なもの、正統と異端、正常と異常、同質と異質、日常と非日常) とに彩られ常に緊張・抗争と動態を内包しているものとして考えられるべきである。

更に、制度化された序列体系としての社会的成層は、類型として二つに区分することができる。すなわち、(i) 一つの制度自体としての成層、(ii) 他の諸制度の産物としての成層、の二つに類型化することができる。⁽⁸⁾ もちろん、成層への接近方法としてはこの二つの特徴を活用し得るが、前者は奴隸制、カースト制 (cast systems) や封建身分制 (estate systems) にみるように宗教、出生、軍事力、法律等による差異によつて不平等な権利や免除を人々が生活していくうえでの前提としておつた成層体系 (不平等という一般的規範の受容) であるが後者は近代や現代のそれらの特徴つけてきたように自然法や自然権のもとにあらゆる人間が平等であるという一般的規範を土台として構成されていることを前提にしている (例えば、日本国憲法を見よ—第十一條、国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる。第十四條、すべての国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において差別されない。第二五條、①すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。②国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない)。

近代以降の社会的成層は平等という一般的規範を前提にすることによつて、むしろ他の諸制度の産物としての不平等構造が問題とされるに至る。周知のように中世や封建社会を自然法・自然権の思想、新しい産業技術と社会関係等の展開によつて否定しつつも、近代社会における平等は法的平等としての形式的平等にとどまり実質的社会的平等を要求し、同時にそれを

推進してきたといえる。また現実には(i)の制度それ自体としての成層——カースト的側面や封建身分的側面は現代においても、全く過去の遺物として消え去つてはいない。従つて、カースト社会 (caste) ↓身分制社会 (estate) ↓階級社会 (class) という発展の単純な捉え方は適切ではない。そして今日において更に新たに「平等革命」が叫ばれつつある。自由の問題と同様に、不平等への関心は絶えることなく、平等と不平等はつねに古く、かつ新しい問題なのである。不平等への関心は、ひとり社会学だけでなく思想、経済、人口、政治、法律、教育、心理、歴史や他の社会・自然諸科学、社会運動、及び計画と政策等の交差する領域で広く深く追求されるべき性質のものであることは明らかである。その意味でも各々専門領域の区枠にそれを閉じこめたり区枠から垣間見る結果にならないように留意すべきであり、それだけに浅学の身には難しい課題である。

(b) 理論的展開

われわれが社会的成層研究を理論的及び実証的に進めていくにあつて、どのような研究成果を参考にすべきなのか。ここでは(i)近代初期の啓蒙思想としての理論的展開、(ii)近代社会の構造的変化の進展における理論的展開、(iii)現代社会的状況による成層研究、の三展開に大きく分けて概観することによつて、現代社会の社会的成層の構造と動態を捉える基本的視座を確認することが本節のねらいである。

(i)近代初期の啓蒙思想としての理論的展開。封建社会からの近代社会の生成と展開は、社会や国家によつて多様であつて厳密な比較史的考察が必要である。これらの歴史的展開は主に十七・十八世紀、十九世紀前半までの拡がりをもつわけであるが、成層理論にとつて注目されるのは近代初期の啓蒙思想にみる不平等の理念的否定という特徴であつた。「制度自体としての成層」の理念的否定であり、人々が序列化されることに對する否定思想の展開であつた。身分、階級、権力が相互

一つに制度的に融合していた状態が崩れつつあり、国家に対して新たに「社会」が見い出され、対外的にも対内的にも変革が求められつつあつた動きの中で現実の地位身分を本来のべき「権利」によつて否定し理念的調整を図ろうとする思想であり、その典型的な急進的展開をルソー（J. J. Rousseau, 1712～1778）の『人間不平等起原論』にみる。

わたしは人類のなかに二種類の不平等を考へる。その一つをわたしは自然的または肉体的不平等と呼んでいるが、それは自然によつて定められ、年齢や健康や体力、それに精神あるいは魂の資質の差から成り立つているからである。もう一つは、一種の約束に左右され、人々の同意を得て定められ、すくなくとも正当化されているから、道徳的または政治的不平等と呼ぶことができる。後者はいくらかの人々が、他の人々に損害をかけることによつて享受しているさまさまの特権、たとえば他の人よりも豊かだとか、尊敬されているとか、権力をもつているとか、さらには人々を自分に従わせるといふような特権から成り立つている。

ルソーによると、自然人（未開人）の生活は自己保存（自己愛）や相互のあわれみに基いて種全体の相互保存に協力し持続されてお¹⁰り、そこには自然的または肉体的不平等が存するにすぎない。ところが、人間精神のあい¹¹つぐ発展のなかで「人間たちがお互いに相手を評価しはじめ、尊敬という觀念が彼らの精神のなかに形成されはじめのやいなや、だれもがその権利を主張した」。自然人（未開人）はただ安息と自由だけを呼吸し、生きること、なにもしないだけしか望まないが、これに反して社会人（文明人）は常に活動的で汗を流し、動きまわり、ますます骨の折れる仕事を求めて絶えず苦しむことになる。「つまり、未開人は自分自身のなかで生きているのに対して、社会人は常に自分の外にあり、他の人々の意見のなかでしか生きることができないのである。そしていわば彼は自分自身の存在の感情を、他人の判断のみから引き出しているのである」¹²。従つて、不平等は自然状態においてはほとんど無であつたのに、人間の能力の発達と人間精神の進歩によつて（社会状態）、法律と所有権の成立（不平等の第一の時期）、為政者の職の設定（第二の時期）、合法的権力より専制的な権力へ

の変化（第三の最後の時期）という変遷をたどりながら、富、貴族の身分または地位、権力、個人的な価値という主な四種の不平等⁽¹³⁾（差別）をつくりだしてきたことを説く。しかしながら、「……自然法をどのように定義するとしても、子供が老人に命令したり、愚かな人間が賢い人間を指導したり、また数多くの飢えた人々が必要なものにもこと欠くというのに、一握りの人たちが余分なものに満ちあふれているというのは、明らかに自然法に反している⁽¹⁴⁾」のである。

現状の社会状態に本来の自然状態を鋭く対置する試みによつて前者を理念的に否定し、やがて『社会契約論』で展開されたように一般意志の最高指揮のもとにおける相互の社会契約を基礎に新たな社会状態（共和国、政治体）を志向することを説いたことは周知である。「われわれのだれもが自分の身体とあらゆる力を共同にして、一般意志の最高の指揮のもとにおく。そうしてわれわれは、政治体をなすかぎり、各構成員を全体の不可分の部分として受け入れる⁽¹⁵⁾」。ルソーによつて、典型的に追求されたように、因習的に因果応報的に説明され機構化されてきた人間の自由や平等、社会状態が、自然主義や合理主義等の影響のもとで批判され否定されて比較史的には多様であつても新たな結合行為・原理が模索され近代史を特徴づけていくことになるのである。

近代初期の啓蒙思想による不平等の否定はルソーにみたように近代を形づくる大きな契機となつたともいえるが、たんに理念的な否定思想にとどまらざるを得なかつた。自由な市場交換を通じて「見えざる手」による調和の観念も、中産階級を中心に担われたものであつたし、シェイスが、第三階級はすべてである、国民全体であると主張しても、それらは新興市民階級（中産階級）を主とした第三身分を中心として展開され⁽¹⁶⁾、近代立憲制も法律的平等、法律的自由を認めるにすぎぬものであつた。そして国家主義と資本主義の発達のものとで、法律的、公的領域において人が画一的・平等に扱われなければならぬ領域として維持することによつて逆に私的領域においては人の多様性、不平等性が促され擁護維持されていった⁽¹⁷⁾。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」といい、「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。唯学問を勤て物

事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なるものは貧人となり下人となるなり」と説く日本の近代主義者福沢諭吉の思想もこのような文脈のなかに位置づけられるであろう。だが、ここに近代啓蒙思想は、直接に間接に近代社会の構造変化の展開における二つの神話を生み落した。一つは、トクヴィルのいう、アメリカ合衆国にその典型をみたように平等の漸次的一般化（近代の不可逆的な平等主義）（「社会的に平等がしだいに進展していくことは神のみ業であり、その主要な性格としては普遍的・持統的であり、日ごとに人間の力ではいかんともしがたいものになつていく。すべての事件は、すべての人々と同様、この進展に奉仕する⁽¹⁸⁾」）のそれであり、他の一つは、マルクスのいう資本家階級と労働者階級の両極分解によるプロレタリア革命を通じての平等と階級のない社会の実現化（ブルジョア階級は何よりも、かれら自身の墓掘人を生産する。かれらの没落とプロレタリア階級の勝利は、ともに不可避である」。「発展の進行につれて、階級差別が消滅し、すべての生産が結合された個人の手集中されると、公的権力は政治的性格を失う。……プロレタリア階級がブルジョア階級との闘争のうちに必然的に階級にまで結集し、革命によつて、支配階級となり、支配階級として強力的に古い生産諸関係を廃止するならば、この生産諸関係の廃止とともに、プロレタリア階級は、階級対立の、階級一般の存在条件を、したがつて階級としての自分自身の支配を廃止する⁽¹⁹⁾」）、である。

(ii) 近代社会の構造的展開と変化における成層研究。ここでは特にマルクス、ウェーバー、ヴェブレン、シュンペーターの提起した問題の輪郭を跡づけておくにとどめる。産業主義が経済活動の再編によつて現実には資本主義社会として、容赦なく旧い社会を打ち壊わしていく勢いがあり身分から階級へ、封建国家から資本主義社会へのむきだしの自律的な胎動をはじめ出した渦の中で、K・マルクス（K. Marx, 1813～1883）は近代社会における階級が階級それ自体としてではなく他の制度（経済制度、経済的基礎の変動、資本主義経済による規定）の産物として把握され、そのもとは両極分解による階級分化が促され生産手段を持たない賃労働者階級の労働からの疎外、一層の窮乏化が進み、即自的階級から対自的階級へと向わせ階級闘争を必然的なものとするという（仮説的）命題を設定した⁽²⁰⁾。

人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の・必然的の・彼らの意志から独立した・諸関係を、すなわち彼らの物質的生産諸力のある一定の発展段階に照応する生産諸関係を、むすぶ。これらの生産諸関係の総体は、その社会の経済的構造を、すなわち法制上および政治上の上層建築がそのうえにそびえ立ち・一定・社会的意識諸形態がそれに照応するところの・現実の土台を形成する。物質的生活の生活様式は、社会的の・政治的の・および精神的の・生活諸過程一般を制約する。⁽²¹⁾

このようにして、史的唯物論によつて人間存在をその物質的条件、労働、生産を基礎として階級状態、階級形成、階級闘争が把握されているが、生産手段の所有・非所有にもとづく生産関係(階級利害、階級的地位、政治的権力の三つの社会諸関係が基礎づけられ重なり合いつつもほぼ同一的なもの、それぞれ同質的なものとして捉えられていた。経済的基礎の変化の歴史的内容の分析が重要であることは確かであるとしても、マルクスによつて(i)他の諸制度の産物としての階級、(ii)法的形式的平等に対して経済的実質的平等、(iii)階級意識(即自的階級と対自的階級)、(iv)資本家階級と労働者階級の二階級モデルと闘争モデル、を明らかにすることによつて近代社会における階級研究、成層研究のもつとも基本的な問題を提示した。⁽²²⁾

M・ウェーバー(Max Weber, 1864~1920)は不平等について、マルクスによつて階級を中心に主に経済的範疇としてとらえたのに対して、「社会層」(soziale Schichten)として把握した。これは広い意味での勢力のちがいであり、勢力は「……一人または多数の人々が共同行為において、それに参加する他の人々の抵抗にさからつて自己の意志を押し通すチャンスである」⁽²³⁾。そして、社会層は①階級(Klasse)、②身分(Stand)、③党派(Partei)の三つに区別される。これらは各々概念的にも区別され一応別々の地位であるが、重なり合う関係にある。階級は、経済的市場的地位、すなわち生活機会によつて条件づけられ、具体的には(i)財産階級、(ii)営利階級(企業者、労働者階級、中等階級)、(iii)社会階級(i)、(ii)にもまたがりうるもので労働者層、知識層、専門家、有産者、教育によつて特権つけられた人々等を指し、次の「身分」と最も近い関係にある)に分けることが出来る。身分は、生活様式の共通性によつて決定される身分的地位、社会的評価、名誉を意味している。これは詳しくは(a)生活

様式、(b)形式的な教育方式、(c)門地とか職業にまつわる威信の諸点によつて基礎づけられる。実際には④通婚、⑤食事の同席、⑥特権づけられた営利機會の独占的占有、または特定営利活動の忌避、⑦他の種類の身分的因習（伝統）のうちに表示されている。⁽²⁴⁾そして、この身分的名譽は必然的にある「階級的地位」に結びつくとは限らないのである。党派は、社交クラブから国家にいたるまでのさまざまの社会關係、結合団体に形成される党派、権力を意味している。

そして、注目されるのは、社会構造の構造変化のなかで、技術的、経済的な革命の時代にはむきだしの「階級的地位」が優越し易く、変革過程が緩慢化すると「身分的」構造の抬頭をきたす、というウェーバーの歴史認識である。

更に、一定の「利害関心状況」に対して「社会層」は必ずしも一様に同じようには反応しないだろう、という理解のしかたが展開された。すなわち、媒介変数、black box の重視であり、こうした関心が近代資本主義の成立過程における宗教や経済倫理、エートスの重要性を認めた。従つて社会構造の把握においても下部構造と上部構造の関連をただ機械的に規定、被規定の關係としてとられることにも反対した。このようにして、ウェーバーのぼう大な歴史的・理論的研究の中でその成層研究は、(i)成層構造の多次元的把握、(ii)制度の動態性と固定性、(iii)利害関心状況と価値意識、といった諸問題を提起することによつて、人間の社会的行為と深く結びつけられて理解され社会的成層（社会層）の構造と動態を一層いきいきと捉えていく理論、方法論及び諸方法の道が拓かれたといえる。⁽²⁵⁾

近代社会の構造的変化は西欧諸国に限定されないで、それらは世界的な多様な拡がりのなかで進展し、また拡大していった。「新大陸」アメリカ合衆国における成層への関心はアメリカ人の夢に強く支えられて展開したが、特に「一八六〇年から一九二〇年までのこの時期は当時の横暴なブルジョアの勝利」と「伝統的土地均分運動の決定的敗北」を告げるものであり、⁽²⁶⁾この一八六〇年代以降の著しい資本主義経済の発達という要因が引き起しつづつあつた諸問題―自営の農民・職人・商人の地位の侵害、工場労働者の出現、労働組合、新しい移民、都市化、技術革新、富の集中、食肉、鉄道、鉄鋼業などの例に

みるような成金階級の出現等——の出現に刺激されて、成層研究が繰り広げられていった。アメリカ合衆国の成層研究の個別の展開については後の機会に触れるので、ここでは、T・B・ヴェブレン (Thorstein B. Veblen, 1857-1929) の研究をとりあげておきたい。ノールウェー移民の開拓地で育つたヴェブレンは、アメリカ像及び資本主義社会の新たな変化を特異な立場で、しかも先駆的に把握していた。新しい変化が引き起されたにもかかわらず、それらを支えている制度自体は極めて保守的要因であることを指摘する。ヴェブレンは、人間の欲望(本能)の展開と制度との関連を位置づけるという試みをしているという点でも、ウェーバーの分析枠と近い⁽²⁷⁾。制度は、個人と社会の特定の関係なり機能なりに関する支配的な思考様式であり、それらは過去の過程の所産であり過去の状況に適應するものであつて、現在の要求にびつたりと合致するものではない。⁽²⁸⁾「社会構造は、その社会の若干の階級の思考習慣の変化を通じてのみ、または結局のばあい、その社会をつくり上げている個人の思考習慣の変化を通じてのみ、変化し発展し状況の変化に自身を適應させる」⁽²⁹⁾。

欲望と制度の相互の関連の中で、ヴェブレンは人間生活の推進力としての本能を①利他的・創造的性向(製作本能、親性本能、好奇本能等)Ⅱ建設型、②利己的・略奪的性向(略奪本能、見栄、支配等)Ⅲ略奪型に類型的に分けて、更にそれらの中心的支配的展開としての文化(制度)を対応させる。原始未開文化、野蛮文化、資本主義的(産業的、金銭的)文化が位置づけられ、人間の略奪型本能が支配的となり制度化されると、貴族、軍人、僧侶、学者、有産者等の有産の非勤労階級、すなわち有閑階級 (Vain class) を生み出すことになる。資本主義文化も、その初期の建設型から略奪型が中心となると、私有財産の浸透と拡大は財産と金銭が見栄(上下の差別的比較)の源泉となる。製作者本能の代りに販売術が、「産業」の代りに「企業」が指導力をもつに至り、いまや富や実力がただ持つだけでなく金銭的に証拠立てられ、誇示されなければならない。すなわち、(イ)誇示的余暇、(ロ)誇示的消費、代行的余暇(家事、召使、家族、妻) (conspicuous consumption, vicarious leisure)、(ハ)最新の流行等を通じて証拠立てられ誇示される。資本主義的金銭的文化の有閑階級は過去の保守的な遺産であると共に、有閑階

級（略奪本能、見栄、支配）の再生産を意味している（身分の保守化、有閑階級の保守主義）。

このように有閑階級にみるような金銭的で誇示的な生活様式が支配的となると、

近代の文明国では、諸社会階級のあいだの境界線は、不明確で変わりやすいものとなつた。そして、このようなことがおこるばあいには、上層階級によつて課せられる名声の規範は、ほとんどなんらの障害なしに、社会構造全体を通じて最低の階層にいたるまで、その強制的な影響力をおよぼす。その結果は、各階級の成員は、そのつぎの上位の階層におこなわれている生活様式を、見苦しくない生活の理想としてうけとり、その理想にかなつた生活をおくるようにつとめるといふことになる。かれらは、うまくゆかなかつたばあいは、その世間的名声と自尊心を失うおそれがあるために、少なくとも上へだけでも、世間一般の基準をまもらねばならないのである。⁽³⁰⁾

ひとたび採用した支出の規模から後退することは、慣習化した支出の規模を富の獲得に應じて拡大することよりもずつとむずかしいことである。後もどりすることはむずかしいけれども、誇示的支出について新たに先にすすむことはわりあいにやさしい。⁽³¹⁾

したがつて、浪費の法則がわれわれにあたえる唯一の逃れ道は、同じように永続しないならかの新しい恰好に救いを求めることである。⁽³²⁾

「人種的に同質である環境内の社会諸階級」の序説で J・A・シュンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883-1950) がすでに一九一〇年代、一九二〇年代に社会諸階級の理論に強い関心を示していたことがわかる。⁽³³⁾「この研究にたずさわつていると、なんだか今日の社会科学はわざわざ二次的問題に没頭してゐるのではないかというような、すなわち、われわれが今日信じ切つてゐる事柄はやがてそれも多分まもなく顧みられなくなるのではないかというような感じが強く起つてくる」⁽³⁴⁾。しかし、社会階級の理論は、基本的に重要であるにもかかわらず、それにふさわしいだけの研究はいまだなされていなくして、シュンペーターは多くの新しい問題を提出しつづつ理論化を試みようとしたといえる。

ただ、彼の強い問題意識と理論的な関心にもかかわらず、彼の経済学における独創的な理論体系のような体系化はここで

は不十分な形でしか展開されなかつた。①階級の本質、②階級のつながり具合の問題、③階級形成、④歴史的に与えられた階級構造の具体的原因や条件にかんする一連の諸問題、を階級理論の四つの領域として挙げてはいるが、シュンペーターがここで実際に論じているのは③階級形成だけにすぎない。しかし、それについての素描に近い命題化の中に注目すべき諸点が含まれている。(イ)社会階級は、家族(個々人の)適性の差異による序列づけであり、すなわち、それぞれの時における環境上「社会的に必要」な諸機能をはたす上での適性の差異として規定されるのであり、後にするように特にアメリカの社会学者達、ウォーナー、デーヴィス、パースンズらによる成層論の機能主義的考察の一端をうかがうことが出来る。その素描のいくつかを記すと、(ロ)個人がある階級の一員であるということは、与えられた事実であつて、その人の意志とは関係のないことである。従つて、人はたとへ特定の階級に属しているとしても、その行動において自らの階級に常に忠誠を示すとはかぎらない。⁽³⁵⁾(ハ)階級は、それが一たび成立してしまふと、それを成立させた社会状態がなくなつてしまつても、そのまま固定し永続するのである。⁽³⁶⁾(ニ)「階級間の隔壁は、階級内における家族の地位の変化を生じさせるのと同じ適性や行動様式によつて、例外なく常に乗りこえられうるものであり、また実際に乗りこえられている」⁽³⁷⁾われわれは、ここでは、シュンペーターが社会階級を社会的に必要な諸機能と個人の適性との関連で捉える、いわば機能主義的把握と、パレートやソローキンの理論化と並行して階級内、階級間の「移動」に理論的な関心を示していたことに注目しておきたい。

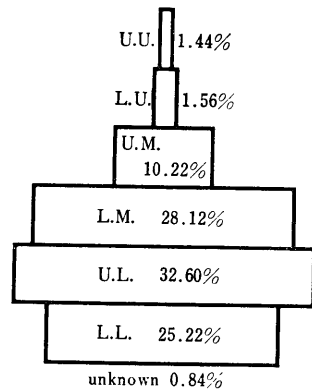
(四)現代社会的状況による成層理論の展開。政治革命や産業革命に伴う近代社会の構造的変化の進展のなかで引き起された社会諸問題―特に貧困・窮乏化、失業、労働作業環境、階級対立等の問題に対する成層研究の理論的展開は、すでにみたように、そのもつとも基本的なものであり、一応の準拠枠・分析枠が用意された。現代社会的状況というのは、ここでは第一次大戦後、特に一九三〇年代以降の高度の産業化、資本主義化、大衆化、社会主義社会の成立、植民地諸国の独立運動及び独立等の状況を指している。この状況における成層研究はほぼ二つの傾向を示すといえる。一つは、前期の動向と準拠枠を

活用してより実証的・個別的研究の展開である。他の一つは、かつての理論を批判検討しつつ新しい社会状況のもとで新たな理論化を試みようとする研究である。

これらの新たな動向の直接的な要因は、やはり、マルクス主義の影響（経験的検討と理論化）と世界大恐慌をあげることができよう。すでにC・ブースやB・S・ロントリー等の、そしてわが国においても高野岩三郎等の貧困についての実証的調査研究がなされていく一方で、リンド夫妻や、ウォーナー等の主に地域社会レベルでの成層の実証研究が繰り広げられていくことになるのはよく知られているところである。機能主義的成層研究が、特にアメリカ合衆国社会の土壌において機会均等や社会移動の問題、およびその実証的な調査と調査方法をめぐって展開されたことは注目されてよい。ここではL・ウォーナー(Lloyd Warner, 1898-1970)の成層研究を検討する。ウォーナーは、もともと(社会)人類学者として出発しているわけだ、特にA.R. Radcliffe-Brown, Robert H. Lowie, B. Malinowski, George Mead, E. Durkheim, G. Simmel等の影響を受けており、一九二六年—一九二九年にオーストラリアのMurngin tribeの生活や習慣についての人類学的調査に従事した後、本国でのヤンキー・シティ調査研究に代表される現代地域社会についての一連の社会人類学的調査研究が試みられた。彼のヤンキー・シティ調査研究(Yankee city studies)はニュー・イングランド地方のNewburyport(マサチューセッツ州)という小都市(調査当時約人口一万七千)をフィールドとして一九三〇年から一九三五年にかけて実施された(しかし、少しづつ一九五九年まで継続された)。

北米の典型としてのヤンキー・シティ調査研究は、ウォーナーを中心として実に社会生活、地位体系(社会階層)、人種集団、工場、宗教と象徴行動等に及んでいるが、この小都市の階級制が、フィールドでの参与法を中心として、上層の上(U・U)から下層の下(L・L)に至る六階層のややダイヤモンド型に近い地位体系として描かれている(第1図参照)(更に the level above the common man, —U. U., L. U., U. M., —13. 2%, the level of the common man, —L. M., U. L. —61. 20%, the level below

第1図 The Class Hierarchy of Yankee City



W. L. Warner, ed., (Yankee City, 1963 p. 43)

Participation) と②地位特性指標 (I・S・C法) (The Index of Status Characteristics) として工夫されて、成層研究の方法論および諸方法が一層議論されることになった。⁽⁴³⁾

経済的地位は、帰するところ成員の地域社会への参与(参加)とそれに対する住民成員の受容という過程 (economic factors-participation-acceptance) の中で社会階層として把握されるというオーナーの基本的な考えによつてこの参与評価法が生れて来ている。従つて、この方法は地域社会の住民、情報提供者によつて提供された評価にもとづいて、研究者、調査員が整理してその地域社会の階層構造を描き出すという手続である。地位特性指標の方法は、比較的費用をかけないで、しかもより短期間に実施可能なものとして (イ)職業、(ロ)所得源泉、(ハ)家屋型式、(ニ)居住地区の四指標に各々一点から七点までの the seven-point scale とそれに weight を与えて順位づけを得る測定方法である。⁽⁴⁴⁾

このようにしてヤンキー・シティ研究によつて展開された理論と調査方法は、特にアメリカにおいてその後多くの研究に影響を与えた。⁽⁴⁵⁾そして、ウォーナー学派の機能主義的性情と、更にリンドやC・W・ミルズ等にもみる権力構造の分析よりも主に地域社会の身分的地位体系、社会移動を焦点とした研究であることは注意しておいてよい。ウォーナーは、class の言

of the common man—L. L.—25.22%)。ウォーナーによれば、「社会階級(階層) (social class) は地域社会の成員達によつて社会的に優位の地位と劣等の地位に位置づけられると信じられ、序列づけられる二つ以上の秩序 (orders) を意味する。⁽⁴²⁾ 階層 (social class) は、地域社会の住民の行動様式や社会的態度の次元を中心にして、地域社会内の成員達の評価を基礎として把握されるわけで、ウェーバーのいう身分の側面が著しく強調された。そして、その測定法は①参与評価法 (E・P法) (Evaluated

業を用いたが、これは社会的威信、職業威信、生活様式（消費形態、居住地区、家屋型式等）、個人移動等を中心とした身分集団（status groups）としての階層概念であり、経済的・政治的不平等の側面は相対的に軽視された。一九三〇年代に至つて大恐慌にみたような技術的・経済的变化に伴う影響によつてアメリカ社会の固定化、硬直化も指摘されるようになったとは云え、一九四〇年代に入ると三〇年代の恐慌が次第に回復されつつあるという状況もあつて、ウォーナーの一連の研究を始め、この当時まとめられた多くの研究がアメリカは依然「中間階級（階層）の社会」であるという考え方に支えられていた。しかも、UU階層からLL階層はむしろ連続的な特徴として把握され、家族や個人の上昇と下降という垂直的社会移動は合衆国の成層体系に特徴的なことであるとして開放性を強調した。ウォーナーはニュー・イングランド地方、中西部、南部等の地域社会の階層研究を通じて、細部において差異や多様性があるとしても、すでにみたように地域社会の成員達による受容と評価、UU階層からLL階層の五あるいは六身分地位体系、中間階級（階層）社会、開放的な移動機会のようにアメリカ合衆国の成層体系の核心は驚くほど同じであるという立場を展開した。⁽⁴⁶⁾ その点では、アメリカの地域社会の伝統を掘り起しつ一九五〇年代の繁栄せる大衆社会論を用意するものであつたといえる。

確かに階級・階層を可能なかぎり經驗的に確認しようとする研究態度、実証的調査方法を開拓してきたという点では高く評価される。同時に、多くの問題点をかかえているといわなければならない。すなわち、(i)ウォーナーの潜在的価値観（合衆国は本来開放的な機会均等の移動社会であつて、しかも社会的不平等は必然的不可避的であるという考え、(ii)情報を得る際の上層階層や中間階層への偏り、(iii)経済的要因や権力構造についての直接的、歴史的分析を相対して欠いている点、(iv)E P法、ISC法も共に他の大都市等の地域社会にどこまで適用可能か、(v)人類学的方法を主にする静態的分析にとどまり歴史的文脈を無視していないかどうか、の諸点がやはり検討されなければならないだろう。⁽⁴⁷⁾

ところで、一九五〇年代に至つて社会的成層の研究は、その理論的展開においても新たな視座がきり拓かれてきたといえ

る。その代表的研究としてR・ダーレンドルフ (Ralf Dahrendorf) の権力論、支配団体論をあげることが出来るだろう。⁽⁴⁸⁾ ダーレンドルフは、マルクスの階級論を①社会学的(経験的)命題と哲学的命題の不当な融合(二例、私的所有がなくなれば一經、⁽⁴⁹⁾ 階級は存在せず、階級がなくなれば疎外はあり得ず、自由の王国が実現される一哲学的命題・観念)②資本主義社会の発展(前期資本主義社会とは異なる後期資本主義社会における多元的構造化)、を中心に詳細な批判検討を試みている。

マルクスにとつて、階級の決定要因は生産手段の有効な私的所有であつた。……この階級理論の適用可能性は、ヨーロッパ社会の歴史の比較的短い期間にのみ限定してしまつてゐることをみた。……階級形成の標識を、有効な私有財産の所有・非所有ということから、権力の行使あるいはそれからの排除ということにおきかえることによつて可能になるといふのが、この研究の主要な命題の一つである。……(生産手段の統制というのは、権力と支配の一特殊ケースであるにすぎず)全体社会の権力および支配の構造、および社会内部の特定の制度的秩序(たとえば企業)こそが、階級形成と階級闘争の構造決定要因である。⁽⁴⁹⁾

階級は、社会的闘争集団であつて、その決定要因は支配団体の内部における権力行使への参加、もしくはそれからの排除のうちに見出される。⁽⁵⁰⁾

われわれのモデルによれば、「階級」といふ語は、支配団体における権力の差別的配分によつて発生する闘争集団を意味している。⁽⁵¹⁾

ダーレンドルフは、後期資本主義社会の多元的構造化、および資本主義は産業社会の一つの形態をあらわしているにすぎない、という現代社会的状況の検討によつて、マルクスの生産手段の私的所有を中心とした階級理論に対して、支配関係、権力を中心に階級分析を展開している。しかし、利害集団としての「支配」と「被支配」の二階級モデル、階級形成と階級闘争の分析(闘争モデル)の二点においてマルクスの立場を積極的に継承している。マルクス以後の産業社会(特に後期資本主義社会)の構造変動は以下のように要約されている。すなわち、①資本の分解―所有と統制、②労働の分解―熟練と成層化、

③「新中間階級」の増大、④社会的移動、⑤理論上および實際上の平等化、⑥階級闘争の制度化、の諸点である。いま、⑥階級闘争の制度化についてのみ触れるなら、労働組合の結成、諸々の労働立法等を通じて法制度による裏づけを得て、階級闘争が一定のルールに基いた一種のゲームとして制度の中に組み込まれてきた。そして、そこでは、しばしば労働貴族を生み、労働組合の保守化の傾向を導き易かつた。

後期資本主義社会においては、それ以前の資本主義社会とは対照的に、産業と社会が分離してきて、労使闘争をふくめた意味での産業の社会関係はますます社会の全体を支配しなくなり、その様式および問題は産業の領域にのみとじこめられるにいたつたのである。⁽⁵²⁾このことの経験的帰結は、⁽⁵³⁾(一)産業労働者の職業的役割はその人の社会的人格形式にたいして包括的な力をうしなうことになり、またかれの職業的役割はかれの社会的行動の一面のみを決定するにすぎない。(二)産業の参加者は、工場の門を出るにさいして、かれの職業的役割とともに産業階級の利害をもおきざりにしてしまふ。(三)産業ストライキがもはや後期資本主義社会のいわゆる民衆には直接影響を与えない。「労働者は、ストライキによつて自分たち自身だけが利益を得て、けつして一般民衆の利益のことを考えることをしない」⁽⁵⁴⁾。(四)政治組織の領域の内部で、労働組合と進歩的諸政党とはもはや同一ではない。(五)後期資本主義社会にあつては、産業と政治社会におけるそれぞれの支配階級と被支配階級とはもはや同一ではないのである。このようにして階級闘争の制度化と労使闘争の制度的分離は、一般的な傾向としては階級闘争の強さ、激しさの減退をもたらしつつあるといえるが、社会的な問題にはいつも逆の傾向もまた必ず存在しているのであり、そしてこれまでの産業的階級闘争から、より広く全社会における政治的権力的階級闘争を考察していくことの必要を説いている。

ダーレンドルフによつて、産業社会の構造変動に伴う、特に後期資本主義社会における政治権力の不平等配分の存在に理論的焦点があてられることになつた。選挙権、被選挙権といったすべてものに共通の基本的権力にもかかわらず、その最低

限だけしか享受しない人びと、(それすら享受しない人びと)と権力ある決定をくだすことによつて他の人々の生活機会を規則的に支配する地位にある人びとの存在を浮きぼりにすることによつて現代社会的状況が如実に示されているように、彼は権力行使への参加とそれからの排除という階級規定、動態的な階級形成と階級闘争の視座から、その注目すべき理論的展開を試みたといえるだろう。「あたらしい階級社会」的特徴については、J・バーナムやT・ガイガー等によつてすでに論じられてきたところであるが、このダーレンドルフの権力論、支配団体論は、M・ジラスやS・オソウスキーと並んで、資本主義社会と社会主義社会における権力への参加をめぐる⁽⁵⁵⁾の差異をもちつても一つの共通的分析枠が準備されたといえるだろう。しかし、社会主義社会も決して一樣でないし、資本主義社会も社会主義社会も単一の「産業社会」へ「収斂」するとする理論は、より深く考察が加えられるべきである。⁽⁵⁶⁾

歴史は資本主義社会の理念型に至る道をたどらなかつた。……われわれ自身の世界においては、所有が生産手段にたいしてもつて諸関係は、いぜんとして人間関係の形成上非常に重要な要因であり、社会生活についてのマルクス主義の洞察がなければ、現代世界に起つている変化についての鋭い分析を行なうことは事実上不可能となつたであろう。しかし、マルクス主義の基準の通用範囲は、重大な変化を受けるにいたつてゐる。

古典的なマルクス・レーニン主義の階級観が生産手段の固有化の行なわれた国々の社会構造を分析するのに不十分であることが見られる一つの表現形式は、スターリンの非敵対的階級という考え方であり、もう一つの表現形式は、これらの国々で特定の集団が享受している特権体制にかんする論議である。社会階級についてのマルクス主義の基準は、資本主義諸国についてもいくらかその妥当性をかくにいたつてゐる。⁽⁵⁷⁾

このように権力論、支配団体論は特に現代的状況において注目されるが、ダーレンドルフは、社会の多元的構造化にもかかわらず支配団体論を中心に限定して階級を論ずることの問題及び権力構造の分析方法の問題、更に、権力、階級形成と階

級闘争が生活機会や生活様式と具体的にどのように関連し合うのかは明確にしていない。

- (1) S. N. Eisenstadt, *Social Differentiation and Stratification*, Scott, Foresman and Company, 1971. M. M. Tumin, *Social Stratification*, Prentice-Hall, Inc., 1967 (『日本英雄誌』『社会的成層』、平誠堂 一九六九年)。Kurt B. Mayer, *Class and Society*, Random House, 1955. G. Lenski, *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification*, McGraw-Hill, inc., 1966.
- (2) Celia S. Heller, ed., *Structured Social Inequality*, the Macmillan Co., 1969, p. 10, Harold M. Hodges Jr., *Conflict and Consensus*, Harper & Row, 1971, p. 217.
- (3) D. J. Treiman, "Industrialization and Social Stratification," in *Social Stratification: Research and Theory for the 1970's*, ed. by E. O. Laumann, The Bobbs-Merrill Co., Inc., 1970, p. 207.
- (4) Elton F. Jackson and Richard F. Curtis, "Conceptualization and Measurement in the Study of Social Stratification," in H. M. Blalock, Jr and Ann B. Blalock, eds, *Methodology in Social Research*, McGraw-Hill Books Co., 1968, p. 114.
- (5) 『社会学論家としてわれわれは、行為者と行為の型を意味する基本語を選んできた。そのようにして選ばれた基本語が理論構築の資材として使われ、いろいろな組合せることにより、より複雑な用語が作られた場合、非常に複雑な概念一例えば、貧困、社会制度、封建主義又は階級など—ですらも、形而上学の此岸にあることが確かとなるからである。』(H・L・ゼターバーグ著、安積・金丸訳『社会学的思考法—社会学の理論と証明』、ミネルヴァ書房、五八頁。
- (6) Kingsley Davis, *Human Society*, the Macmillan Co., 1967 (1948), 特に第五章を見よ。H・O・ラスネル著、永井陽之助訳『権力と人間』、創元新社、二〇一—三三頁。森博著『社会学的分析』、恒星社厚生閣、一九六九年、一七八—一九頁。
- (7) James Littlejohn, *Social Stratification: An Introduction*, London, George Allen & Unwin Ltd, 1972, p. 11
- (8) T. H. Marshall, *Class, Citizenship, and Social Development*, N. Y., Doubleday & Company, Inc., 1964, pp. 84-85.
- (9) J・J・ルソー『人間不平等起源論』(一七五五年)(小林善彦訳)、『世界の名著・ルソー』所収、中央公論社刊、二一八頁。
- (10) 同書、一四三—四頁。
- (11) 同書、一五八頁。
- (12) 同書、一八四頁。
- (13) 同書、一七九—一八〇頁。
- (14) 同書、一八五頁。
- (15) 同『社会契約論』(一七六二年)(井上幸治訳)、『世界の名著・ルソー』所収、二四三頁。
- (16) シュイェス著、大岩誠訳、『第三階級とは何か』、岩波文庫。

- (17) 佐藤幸治「立憲制の危機」、『中央公論』昭和四九年六月号。
- (18) トクヴィル『アメリカにおけるデモクラシーについて』(一八三五年)(岩永健吉郎訳、『世界の名著』(中央公論社刊)所収、四四四頁)。「知能が力と富の源泉となつて以来、知識の発展、新しい発見、新しい着想はすべて、人民の側の(利用しうる)力の萌芽と当然に考えられるに至つた」(四四三頁)。「……ここに階層間の混合がはじまる。人間を隔てる障壁はしだいに低くなる。所領が分割され、権能は分掌され、啓蒙かひろがり、知識は均一化する。社会の状態は民主(平等)的となり、デモクラシーは制度と習俗において平和のうちに確立される」(四四六―四七頁)。
- (19) マルクス、エンゲルス著、大内・向坂訳『共産党宣言』、岩波文庫、五六頁、六九頁。更に Reinhard Bendix, "Inequality and Social Structure: A Comparison of Marx and Weber", A.S.R., Vol. 39, No. 2, April, 1974, pp. 149-161 を参照の事。
- (20) 『ノイヒルンゲン論』、『哲学の貧困』、『共産党宣言』、『ハイ・ポナムルトのブリュネメール一日』、『経済学批判』、『資本論』等参照。
- (21) マルクス著、宮川実訳『経済学批判』、青木文庫、一九頁。
- (22) R・ダーレンドルフ著、富永訳『産業社会における階級及び階級闘争』、ダイヤモンド社、一九六四年、T・B・ボットモア著、馬場・深田・田中共訳『現代社会の階級』、川島書房、一九六七年。Anthony Giddens, *The Class Structure of the Advanced Societies*, London, Hutchinson Univ. Library, 1973, R. Bendix, *op. cit.*
- (23) ウェーバー著、浜島朗訳『権力と支配』、みすず書房、二二六頁。
- (24) 同書、一四八―一九頁。そして次のことを指摘している。「…近時アメリカ合衆国では、因習的な生活様式に基礎をおく「身分的」構成か、伝来の民主制から特徴的な仕方では発達をとけている。たとえば一定街区(「屋敷街」the Street)の住民だけが「上流社会」society に属するものとみなされ、また交際できるものとされて、お互に往き来しているほどである」(二二八頁)。
- (25) R. Bendix, *op. cit.*, R・シンディクス著、折原浩訳『マックス・ウェーバー』、中央公論社、一九六六年、H. H. Gerth and C. Wright Mills, *From Max Weber: Essays in Sociology*, A Galaxy Book, 1958, 内田芳明『ウェーバー社会科学の基礎研究』、岩波書店、一九六八年、A. Giddens, *op. cit.*
- (26) Charles H. Page, *Class and American Sociology, with a New Introduction*, Schocken Books, 1969, p. 8. (斎藤・内藤訳『アメリカ社会学と階級理論』(旧版)、八千代出版、二二頁)。
- (27) D・マーチンデル著、新睦人訳『現代社会学の系譜』(上・下)、未来社、一九七一年、特に第一章を参照のこと。
- (28) T・ヴェブレン著、小原敬士訳『有閑階級の理論』、岩波文庫、一八三―一四頁。
- (29) 同書、一八五頁。
- (30) 同書、八四―八五頁。
- (31) 同書、一〇―一二頁。
- (32) 同書、一七一頁。

- (33) J・A・シモンヌーター著 都留重人訳『帝國主義と社会階級』、岩波書店、一六六頁。
- (34) 同書、一六九頁。
- (35) 同書、一七七頁。
- (36) 同書、一七八―一九頁。
- (37) 同書、二四九頁。
- (38) Vilfredo Pareto, *The Rise and Fall of the Elites*, (Introduction by H. L. Zetterberg), the Bedminster Press, 1968. P. A. Sorokin, *Social and Cultural Mobility, the Free Press of Glencol, 1959 (1927)*.
- (39) B・S・ラウントリイ著 長沼弘毅訳『貧乏研究』(一九〇一年)、『ダイヤモンド社』一九五九年、高野岩三郎「東京に於けるケル二十職、工家計調査」(一九一六年)、『月島調査』(一九二一年)、『生活古典叢書』7、家計調査と生活研究(解説・中録正美)、『同叢書』6、月島調査(解説・関谷耕一)、『光生館』及び高野岩三郎編著『本邦社会統計論』、改造社。
- (40) W. Lloyd Warner, *Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe*, N. Y., Harper and Row, 1964 (1937).
- (41) "Yankee City Series," Vol. I, W. L. Warner and Pual S. Lunt, *The Social Life of a Modern Community*, Yale Univ. Press, 1941; Vol. II, W. L. Warner and P. S. Lunt, *The Status of a Modern Community*, 1942; Vol. III, W. L. Warner and Leo Strole, *The Social System of American Ethnic Groups*, 1945; Vol. IV, W. L. Warner and J. O. Low, *The Social System of a Modern Factory*, 1947; Vol. V, W. L. Warner, *The Living and the Dead 1959*; W. L. Warner, ed., *Yankee City, one volume*, Yale Univ. Press, 1963.
- (42) W. L. Warner, *Yankee City*, 1963, p. 36.
- (43) W. L. Warner with M. Meeker and K. Ellis, *Social Class in America*, Harper and Row, 1960. Milton M. Gordon, *Social Class in American Sociology*, McGraw-Hill Paperback Edition, 1963, H. Page, op. cit.
- (44) W. L. Warner, "A Methodology for the Study of Social Class," in *Social Structure*, ed. by Meyer Fortes, Russell and Russell, Inc., 1949, pp. 1-17, W. L. Warner, *Social Class in America*, 1963.
- (45) M. M. Gordon, op. cit., pp. 86-88.
- (46) W. L. Warner, *Social Class in America*, pp. 21-24.
- (47) M. M. Gordon, op. cit., H. Page, op. cit., John Pease, William H. Form and Joan Huber Ryvina, "Ideological Currents in American Stratification Literature," *The American Sociologist*, Vol. 5, No. 2, May, 1970, pp. 127-137, Stephan Thernstrom, "Yankee City Revisited," *A. S. R. April* 1965, pp. 234-242.
- (48) R・ダーランドルフ著 富永健一訳『産業社会における階級及び階級闘争』、『ダイヤモンド社』一九六四年。
- (49) 同書、一八九頁。

- (50) 同書、一九一―二頁。
- (51) 同書、二七八頁。
- (52) 同書、三六六―七頁。
- (53) 同書、三七二―八頁。
- (54) 同書、三七六頁。
- (55) ミロバン・ジラス著、原子林二郎訳『新しい階級』、時事通信社、一九五七年。S・オソウスキー著、細野・大橋訳『社会意識と階級構造』、法律文化社、一八六七年、Celia S. Heller, ed., op. cit.
- (56) A. Giddens, op. cit., 特_ニ第十二、十三章を参照のこと。
- (57) オソウスキー、前掲書、二四九頁。

〔Ⅲ〕 社会的成層の構造と動態

——不平等への新しい接近と分析枠——

われわれは、前節で近代社会および現代社会的状況における成層研究の展開を、主に理論的展開にみる基本的問題・分析枠に焦点をあてて検討した。近代社会は人間の自立化の欲求に支えられて、産業社会と分析的科学主義によつて特徴づけられてきたところが大きい。近代の産業社会の特徴は、農業社会とは異なり産業主義 (Industrialism) を中心とした生産形態によつて支えられてきた社会であり、積極的に人間の適応能力の著しい増大 (adaptive upgrading) に特徴づけられた。そこでは、人間による自然の積極的な利用、人間個人の側の技術や社会組織への順応・条件づけ、教育万能等が主張されてきた。これらの展開は、歴史的現実的には、ナシヨナリズム、近代資本主義 (および社会主義)、人間の理性・合理性への信頼 (過信) と結びついてなされてきたわけで、われわれは、依然として諸々のユートピアとイデオロギーの中で、植民地諸国の独立と高度産業化の段階に達したが、(i) 不平等と差別の問題はまだまだ解決されてはいないし、(ii) 人間活動のますます多くの側面での官僚制化、(iii) 福祉のためにも戦争のためにも共に拡大巨大化していく (行政) 国家、(iv) 科学と技術の増大する戦略的役

割—「科学技術的社会」の出現、(v)「大衆社会」を可能にする、コミュニケーションにおける目ざましい革新、(vi)高まる人種闘争、(vii)固い社会秩序の急進的批判と、新しいライフ・スタイルとを結びつけつつ、広がり育ちつつある青年運動、そして(1)人口・資源・環境破壊・核兵器・戦争・災害等の不安と恐怖などの渦、といった現代社会的状況下に在る。

いまだに「貧困」「貧困層」が存続していることは事実である。老人世帯、母子(父子)世帯、病人や障害者世帯、高い教育水準を受けられなかつた人々、過疎や過密の状態の中で生活し続けざるを得ない人々(農村や都市の現実)、不安定な就労状態にある未組織労働者・未熟練労働者や零細な自営層、そしていわれなく差別や抑圧を受ける人々、が存続し、あるいは再びつくり出されているのである。人々が洗濯機を買ったり、自動車をもつたりすることが、直ちにそれ相当の見苦しくない住居や充実な市民権を確保にはしないし、また彼の子供達がそれ相当の仕事や教育に等しく接近することを確実にしない⁽²⁾。更に、適応能力が著しく増大してきたといつても、われわれにとつて不安定な生活状況が続いていることに大きな変化はない。科学技術の発達がわれわれの適応能力を著しく高めたけれども、それだけにそれらの破壊力も大きい。生活保障や社会福祉の不充足さ、われわれの生活のもろさ、起りうる生活破壊といった状況にわれわれが一般的に、そして差別的に置かれている。

成層研究の理論的展開によつても、また現実の姿によつても明らかのように、不平等は、産業社会の構造変化と、逆にわれわれ自身のより高い抱負とによつて歴史的社会的に再構造化されてきた。そして、そのことが現代における不平等についての新たな視座を掘り起しつつある。社会革命や産業化が、そのまま機会均等な、しかも平等社会を実現してきたと考えるのは間違ひであろう。われわれは、人間生活における自立化と連帯、そしてある面での非成層化の動きを認めつつも、なお再成層化—不平等構造、成層構造の再編成が進められてきたことに目を塞ぐことは出来ないだろう。そこで、前節での成層研究の理論的展開を受けて、最近の一九六〇年代以降の研究について不平等への新しい接近という視点から、(i)「貧困」と

相対的剝奪と、(ii)「貧困」から社会的不平等へ、(iii)社会的権利と社会変動の基本的問題点についてのみ動向を検討してみよう。前節での成層の前提的検討と理論的展開に加えて、これによつて、われわれが現代社会における成層の構造と動態を考へていく上で、いかなる配慮と分析枠が必要なのかの手懸りを得るであろう。われわれは、手探りながらかすかな光明を見出しつつも、現実の深みと数々の障壁の前で漂流し絶望しつつ、新たな状況規定、価値の探求、行動からも逃れることは出来ない。

(i)「貧困」と相対的剝奪と

われわれが、「貧困」を何をもちて、どのような水準で、如何に決定するのかは、実は大変に難しい。本来あるべき生活標準とか最低限度の生活水準というとき、それがどのようなことを意味しているのだろうか。この貧困をめぐる最近注目すべき考え方は、相対的剝奪感の概念による研究に示されている。かつての貧困研究の主たる関心は所得と肉体的能率の維持 (Income and the maintenance of physical efficiency) といった狭い概念と結びついたものだった。⁽³⁾ ラウントリの『貧乏研究』における肉体的条件、栄養基準を中心とした規定—貧乏生活状態を(a)その総収入が、家族員の単なる肉体的能率を保持するための最少限度にも足りない家庭。この部類に属する貧乏を第一次貧乏(primary poverty)と称する。(b)その総収入の一部が、他の費途に転用されない限り、単なる肉体的能率を保持するために十分な家庭。この部類に属する貧乏を第二次的貧乏(secondary poverty)と称する—に如実に現われている。⁽⁴⁾ ここでは、単なる肉体的能率を保持するために必要な衣食住(食物、家賃、家庭雑費—衣服、燈火、燃料等—)の最低限を賄うに必要な収入額に決定されるのであり、人間の心理的、倫理的、社会的の面の発達のために必要とされる支出は考慮されなかつた。⁽⁵⁾

しかし、このように、かつて産業化の過程で労働力再生産を基礎に低所得世帯に適用された「貧困」という歴史的用語を、高度産業社会に押し広げようとすると、それは不十分なものになつてしまつていふ認識がなされつつある。⁽⁶⁾ 経済

成長が持続し繁栄した豊かな先進産業社会においても貧困の人々の比率は上昇し得るのである。だが、現代社会的状況において、貧困の相対的概念が要請される一方で、他方では多くの発展途上諸国では絶対的な食料危機や餓死が深刻な問題となつていたのである。したがつて、われわれは相対的剝奪そのものの内容をより深く検討していかなければならない。あるものを欠足し損失している状態の比較的位置 (a comparative position of losing out) こそが、もつとも多く貧困な人々を特徴づけるのであり、⁽⁷⁾「貧困は、相対的剝奪 (剝奪感) の概念によつてのみ客観的に規定され、そして一貫して適用されることが出来る」。「個人、家族、集団が、彼らが属している社会において、慣習的に、あるいは少くとも広く奨励して認め合つてい

る常食のタイプを得たり諸活動に参加したり生活条件や楽しみを持つだけの資源 (resources) を欠いている時に、貧困であるといわれる」⁽⁸⁾のである。社会なり集団なりの価値標準、生活標準に自らの生活状態を比較対照して相対的にその「貧しさ」が明らかにされるのである。このことは、食物、衣服、住居などについても、職業と仕事、教育、余暇、流行等についてもいえるわけで、「貧しさ」の水準はわれわれの価値標準・生活標準に照らして肉体的条件の貧乏線を越えて上下にゆれ動くのである。貧困についてのこのような社会的な理解は、すでにT・ヴェブレンにも、わが国の高田保馬の研究にも深く示唆されていた。⁽⁹⁾しかし、「相対的剝奪 (剝奪感) (relative deprivation)」は最近ではS・A・ストッファー、R・K・マートン、W・G・ランシマン、P・タウンセンド等によつて準拠集団 (reference group)、「社会的準拠枠」(social frame of reference)、「期待パターン」(patterns of expectation)、「状況規定」(definitions of the situation)、「重要な他者」(significant others) の概念とともに展開されてきたものである。⁽¹⁰⁾人々は自らのおかれている状況を、特に重要であると関係づけている他の諸集団の状況や他人々の諸カテゴリーと比較して、自分達を剝奪されている (みじめである、むくわれていない) (あるいは、まだましである、特権づけられてゐる—relative gratification) とみるのである。(例えば、職業、消費水準、教育水準、余暇等の変化をみても明らかであろう)。

今日、われわれが貧困をとりあげる時、狭く限定した意味での怠惰、脱落、意欲・能力の欠如等による貧困、肉体的能率

等の肉体的条件の規定による一定の貧困層では、不十分になつてゐる。貧困と不安は再編され、再生産されていくのであつて、それらはわれわれ自身の価値標準・生活標準に照らした相対的剝奪の理論的、実証的研究によつて一層究明されていかなければならない。そこでは、①客観的剝奪 (objective deprivation) ②規範的剝奪 (normative deprivation) ③主観的剝奪 (subjective deprivation) の區別と測定、測定可能な諸資源のタイプの設定、地域・全国・国際的な価値標準、④主観的剝奪 (subjective deprivation) の區別と測定、測定可能な諸資源のタイプの設定、地域・全国・国際的な価値標準の配慮、一時的貧困と長期的貧困 (temporary and long-term poverty) といった分析枠の検討がなされるであらう。⁽¹¹⁾

(ii) 「貧困」から社会的不平等へ

この「貧困」から社会的不平等への把握は、以上のところからも明らかであろう。貧困が肉体的条件上の規定や社会構造の構造変化の中での窮乏化理論、労働力再生産理論によつて明らかにされるばかりでなく、より以上に価値標準、生活標準に照らして相対的に捉えられるということは、その「貧困」の内容そのものをも拡大させずにはおかない。最近、F・ツワイクやゴールドソープ等によつて手段的集産主義や家族中心主義によつて特徴づけられている、上層の労働者階級を中心とする「新しい労働者階級」の有産階級化 (embourgeoisement) や新中間階級化の動向は、確かに経済的に豊かになつたことを示すが、それ自身が相対的であり、「個人は、食、住をはじめ輸送、そしてある種の娯楽について十分な個人的需要を備えられる程度には裕福であるかもしれないが、道路とかスポーツやレクリエーションが手軽にできること、またはよい労働条件、そして快適ですばらしい都会環境といった点で、十分に満足しうるほどに必要とされているものを個人的に実現することはできないのである」⁽¹²⁾。実際に、個人の富と個人の享樂とを無制限に追求することは、労働条件、労働環境、生活環境、公的サービスの貧弱にする結果になるのである。そして、後期資本主義社会における経済的豊かさ、階級闘争の制度化、社会構造の多元化が認められるとしても、「……共同の目的にたいして冷淡なまた情熱をもたない労働者階級の姿は一時期の姿として見るべきものであつて、連続映画の最後の一場面として見るべきではない。たとえ、それを一時的な美しいものとし

たにしても、それは状況のすべての特徴を判断してはいないのである⁽¹³⁾。従つて、われわれは、貧困、労働者意識についても、また人々の利害の潜在化や顕在化についても、より深く、関連的な構造のうちに考察していかなければならない。すでに〔I〕「不平等への関心」で引用したD・J・トレイマンの命題のうち、「産業化されるにつれて、左翼的な政治組織への支持は少くなるだろう」(前出、命題D・6)、「社会における地位の結晶化の度合が大きくなると、所得が彼らの教育水準と釣り合う水準以下の集団は急進的な政治活動にかかり合う可能性は大きくなるだろう」(前出、D・8)という命題も、こうした文脈において再検討され、確認されなければならないであらう。

「貧困」の内容そのものを拡大せずにはおかないということは、何を意味するのか。それは、所得や財産が依然確かに重要ではあるが、接近し利用可能にするという他の諸権利が、同じく重要性をもち始めつつある、ということである。すなわち、「資源支配権」(the command over resources)という広範な見方が、経済的なものを越えて(土台として)拡大していくことを要求しているのである⁽¹⁴⁾。「貧困は、経済的不十分さの条件であるだけではない、それは社会的、政治的排外でもある⁽¹⁵⁾」。従つて、それは社会的不平等(social inequality)という広い概念によつて把握され、われわれのいう社会的成層の問題領域において考察されることである。社会的不平等を検討していくにあつて、S・M・ミラーとP・ロビーは、(1)所得、(2)資産、(3)基本的サービス、(4)教育と社会移動の機会、(5)さまざまな形態の意思決定への参加、(6)自尊の次元を設定している⁽¹⁶⁾。各々のより具体的な指標は、(1)所得—家計中心的貧乏線(従来の貧困研究の主たる接近)、比較所得(全国世帯の平均所得額を標準として、その標準の五〇%の額の世帯を貧困層、標準の三三%、あるいは二五%を極貧層とする)、全国民所得のシェアの五分位底辺層の構成、の各々の接近法の時系列的検討、所得額だけではなくその安定性、さまざまな特別給付(fringe benefits)、(2)資産—当座の所得は家族の経済的位置を測るには不十分な指標であり、株式・土地・家屋等の資産、預金、保険や年金、(家具設備の例のように)過去の消費、住居の特徴、(3)基本的サービス—健康、近隣(生活)環境の快適さ、交通運輸、法的

社会的サービス、(4)教育と社会移動の機会—教育費用、進学、卒業、就職、職業移動等、(5)さまざまな形態の意思決定への参加—投票、代表(議員)、官僚制、参加、心理的無力感、職場における権力と権威関係、(6)身分的地位と満足感—社会的名誉、生活スタイル、自尊、を挙げてアメリカ合衆国の場合の社会的不平等の現実を測定していこうとしている。しかし、彼ら自身が認めているように、利用し得るデータの範囲と内容から云つても、今後の社会的不平等研究のための問題提起として受けとめるべきだろうと考える。貧困を取り上げていく過程で、われわれは帰するところ、その経済的位置ではなく、個人人の「生活の質」を問題にすることとなり、また、このことは個人人の行政府に対する関係ばかりでなく、人々の間の「諸関係の質」もが重要であることを意味している。⁽¹⁷⁾

更に、このような社会的不平等の理解は、ウェーバーの階級、党派(権力)、身分の社会層の考察のうちにすでに示唆されていたように、個人、家族、及び諸集団が社会的不平等の諸次元での位置づけ、序列づけにおいて各々等しく与えられているとは限らない、ということの意味する。すなわち、「地位の整合(一致)と不整合(不一致)」(status consistency and status inconsistency, rank equilibrium and rank disequilibrium)の概念が導入されてくる。各々の次元でいずれも高い(あるいは低い)序列づけを得て一貫している場合には、地位の整合度が高いことを示し、各々高低で一貫していない場合には整合度は低い、といわれる。しかも、地位の整合・不整合という接近は、社会移動や生活ステージ、生活周期(Life cycle)という動態的側面からも把握されなければならない。

(四) 社会的権利と社会変動

不平等への新たな関心と接近は、近代社会の構造的変化が引き起した現代社会的状況において、人々の間にまた新たな意欲と抱負をたぎらせることによつて、人間存在そのものをも再考察せしめることによつてもたらされたといえる。T・H・マーンシャルの鋭い洞察に示されたように⁽¹⁸⁾、それは歴史的に、比較史的に、市民権・公民権の拡大過程である。平等を広範な

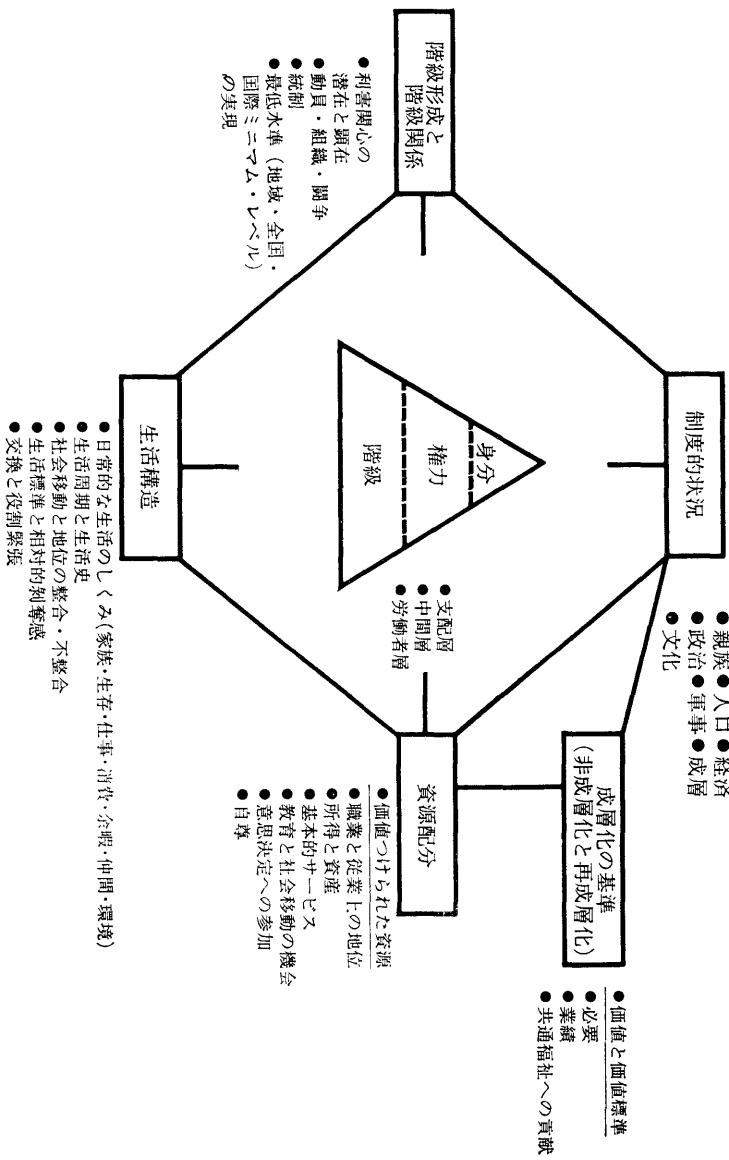
権利 (Rights) として要求してきた展開過程として把握することである。前近代では特権が少数の支配層・エリートに限定されていたのに対して、産業社会では、ヨーロッパを中心に十八世紀に、まず、所有権、法の前の平等、言論の自由などの市民権が産業資本家階級を中心とする市民層によつて獲得され、次いで一九世紀に（乃至二〇世紀）参政権などの政治的権利が労働者階級を中心に要求され獲得され、そして二〇世紀においては生存、労働、保障、福祉、教育など社会権がこれまで要求され拡大されてきた。少し荒つばい捉え方になるが、それぞれ、産業革命、労働者階級、新中間層の出現とほぼ対応して、あるいは産業化の第一段階、第二段階、第三段階の過程に対応して市民権・公民権が拡大されてきたといえるだろう。近代社会を特徴づけてきたともいえる市民革命、産業革命、業績（成功）の原理が、今世紀に入つて社会権の要求にみる如く、広く社会平等の達成、その新たな制度的要求によつて再検討をせまられていることは、一つの革命的状況ともいえる。⁽¹⁹⁾新しい歩みを画するものであるかもしれない。しかし、しばしば耳にする「脱工業化社会」(post-industrial society)、「文明後社会」(post-civilized society)、「電子工学的社会」(technetronic society)も、こうした現代社会的状況における新たな変化を特徴づける試みとしては評価されなければならないが、社会構造の構造変化、特に経済構造や科学技術を一次元的に強調している傾向が強いといわれなければならない。⁽²⁰⁾産業構造の変化や科学技術の発達（理論的知識）が一人歩きするのではなく、社会の構造変化の中でさまざまな人々（支配層・エリート層、中間層、労働者層）の新たな意欲と抱負によつて担われ、対応されているのである。

市民権・公民権の展開は、所有権、法の前の平等といった形式的な法的平等から、広い意味での資源への接近やその利用可能性の平等、すなわち生存権や社会権のように実質的な社会的平等の要求へと繰り広げられてきたといえる。しかし、ここに極めて難しい問題が潜んでいる。それは、しばしばなされる自由と平等との対立的な二者択一的な理解ではなく、実質的な平等ということの理解についてである。しかも、それは（アリストテレスの政治学におけるように）古くからの議論であり、

いつも新たに掘り起されてきたものである。寡頭制と民主制、価値相応の平等 (proportionate equality) と数的平等 (numerical equality)、エリート・有能な人々と大衆・誰れもが等しい享有、功績・業績 (merit) と必要 (needs)、とつた二つの原理がいずれも実質的な平等の内容であるとして理念的な論争がなされ歴史の契機を形づくつてきた。近代社会の展開においても、価値相応の平等と数的平等とを共に拡大してきたが、近代社会の中心的な平等原理は、競争、適者生存、進歩の観念が次第に優先され支配的となるにつれて、価値相応の平等、業績制 (meritocracy) を主としてきたといえるだろう。しかし、そこでは、出発点における機会均等の原理 (the principle of equality of opportunity)、個々人の達成志向、社会移動の増大等の強調は、結果における平等 (the equality of result) を導くものではなかつたという認識が、業績主義に疑問 (遺伝と知能、階級、機会ということの意味、機会均等の原理の保守性) を提してきている。⁽²¹⁾「機会を均等化し得ないばかりでなく、もしたとえそれが出来ても、均等な機会の結果における不平等を明白に減ずることはない⁽²²⁾」という感覚と考察が、さまざまの潜在的利害関心と社会運動を顕在化させてきたわけで社会諸政策と制度的変革を要求しつつある。

現代社会的状況での不平等は、どのような平等基準 (正義) によつて捉え直されていくのか。それは、必要 (needs) か、さもなくば業績 (merit) か、の選択的議論ではなく、市民権・公民権の拡大過程という歴史的事実を踏まえて①権利としての要求・必要 (needs)、尊厳・自尊 (self-respect)、②業績 (merit)、称賛 (praise)、③共通の福祉への貢献、の基準を相互に如何に結びつけていくかということであろう。D・ベルの競争によつてかちえた合理的権威の地位という「正当な業績主義」⁽²⁴⁾ (a just meritocracy) (大学は、学問、知的探求の権威と) (そして、十分に有能なものからまた能力あるものへと) 知識の伝達にさざげられるのであり、大学こそ、その業績主義であり得るし、なければならぬ) の主張は、やはり科学的技術主義や産業主義 (イデオロギー) の直線的な論理にそつたものではないかといわなければならぬし、業績や称賛自体はしばしば身分化され、ゆがめられ易い。⁽²⁵⁾ 従つて、先に(II)「貧困」から社会的不平等へという認識の中にみたように、社会的不平等の諸次元(①~⑥)につ

第2図 社会的成層の構造と動態



いて平等基準の①権利としての必要を土台として各々最低水準を設定して(国際的ミニマム、国民的ミニマム、シビル・ミニマム等)、それらを社会運動と政策決定及び実施の過程で実現していくことが、われわれの課題である。そして、その実現は帰するところ現にわれわれ自身の生活標準、価値標準に依つていられるばかりでなく、将来の価値標準と社会変動への新たな関心、抱負によつても決められてくるのである。

以上の検討によつて、社会的成層研究における不平等への新たな接近を、貧困—社会的不平等—社会的権利—社会変動への動態的展開として位置づけてきたが、社会変動への関心は確かに社会指標の研究や社会計画論によつても接近される必要があることは当然であるとしても、その基礎として、現代というこのような変化に満ちた歴史的社会的状況における人々の社会的行為にこそより深く注目しなければならぬと考える。社会構造の構造変化と人々の新たな抱負のもとで、その人々の新たな抱負とはどのようなものなのか、人々の日常生活と交換(exchange)、交換と制度、役割緊張と葛藤、の事実こそより深い関心を向けることが必要であろう。「現代」とは、まさに人々のそのような歴史的状况を意味している。(不平等は人々の接触を遠ざけ、緊張や対立的関係を強める。「相互作用のひん度が高ければ、お互いの親密感が深まる」。「平等の状態につき合う程、人々は同じ価値観や規範を持つようになり、又その人々同志の親愛感が増す」。「自己評価は、その人の属する階級の位階、すなわち、社会がその集団を如何に評価しているかにより強く影響される」²⁶)。最後に社会的成層の構造と動態を把握していく上での(i)制度的状況、(ii)成層化の基準、(iii)資源配分、(iv)生活構造、(v)階級形成と階級関係という五つの軸からなるわたくしなりの分析枠を図式化(第二図)しておく。現代社会における不平等構造は、多次的で、さまざまな地域・全国・国際的水準における歴史的な諸研究と比較研究を、しかも政策形成的で課題解決的な諸研究を必要としている。(一九七四年七月稿)

(一) Charles H. Page, *Class and American Sociology, with a New Introduction*, Schocken Books, 1969, p. Iviii.

- (2) S. M. Miller and Pamela Roby, *The Future of Inequality*, Basic Books, Inc., 1970, p. 5.
- (3) Peter Townsend, "Poverty as relative deprivation: resources and style of living," in *Poverty, Inequality and Class Structure*, ed. by Dorothy Wedderburn, Cambridge Univ. Press, 1974, p. 16.
- (4) B. S. ラウントリイ著 長沼弘毅訳『貧乏研究』ダイヤモンド社、九七—九八頁。
- (5) 同書、九八—九九頁。
- (6) S. M. Miller and P. Roby, *op. cit.*, p. 5.
- (7) S. M. Miller and P. Roby, *op. cit.*, p. 5.
- (8) P. Townsend, *op. cit.*, p. 15.
- (9) T. ウェンレン著 小原敏士訳『有閑階級の理論』(一九九九年)、岩波文庫、高田保馬『社会学原理』、岩波書店、一九一九年、高田保馬『消費階級の研究』、有斐閣、一九五六年。
- (10) S. A. Stouffer, E. A. Suchman, L. C. Dittmer, S. A. Star, R. M. Williams, Jr., *The American Soldier: Adjustment during Army Life*, vol. 1, 1949, Samuel A. Stouffer, ed., Social Research to Test Ideas. The Free Press of Glencoe, 1962, R. K. トートン著 森・森・金沢・中島共訳『社会理論と社会構造』(一九五七)、『ミナミ書房』W. G. Runciman, *Relative Deprivation and Social Justice*, Routledge & Kegan Paul, 1966, P. Townsend, *op. cit.*
- (11) P. Townsend, *op. cit.*, 更に小沼正『貧困—その測定と生活保護』、東大出版、一九七四年を参照のこと。
- (12) T. B. ホットモア著 馬場・深田・田中共訳『現代社会の階級』(一九六五)、川島書房、一九六七年、一四—二三頁。
- (13) 同書、一四—一頁。
- (14) S. M. Miller and P. Roby, pp. 11-12.
- (15) *ibid.*, p. 12.
- (16) *ibid.*, part I.
- (17) *ibid.*, p. 186.
- (18) T. H. Marshall, *Class Citizenship, and Social Development*, Doubleday & Company, Inc., Garden City, N. Y. 1964, *Chapt.* 10. 田中成明『マ・ン・ローヌスの「公正な」への正義論』(現代自然法論の理論と諸問題)『法政学年報』一九七一年、一六一—一〇三頁。
- (19) Herbert J. Gans, "The Equality Revolution," in *Technology and Social Change*, Quadrangle Books, ed., eg W. E. Moore, 1972, pp. 208-221.
- (20) Anthony Giddens, *The Class Structure of the Advanced Society*, Hutchinson Univ Library, 1973, *Chapt.* 14.
- (21) Daniel Bell, *The Coming of Post-Industrial Society*, Basic Books, pp. 424-433
- (22) *ibid.*, p. 432.

- (23) W. G. Runciman, *op. cit.*, p. 261.
- (24) D. Bell, *op. cit.*, pp. 451-455.
- (25) Michael Young, *The Rise of the Meritocracy, 1870-2033: An Essay on Education and Equality*, Penguin Books, 1970 (1958)
- (26) H・L・セターハート著 安積・金丸訳『社会学的思考法』ミネルヴン書房 一九七三年 一四頁 Bernard Berelson and Gary A Steiner
Human Behavior: An Inventory of Scientific Findings, N. Y., Harcourt, Brace and World, Inc., 1964, p. 327, p. 489